

祈りとは、成功や栄光、そして克服の条件の一つとなつていた。

だから人々は、何かにつけて祈りを捧げる^{こた}。夢を叶える便利なものが、国で生きていく限り視界の端^{はし}にちらつくから。

だから、すがりつく。

『建国当初からこの国の中心にそびえ立つ大聖堂は祈りを捧げ続けたせいで今までどおりに機能するのが難しくなりつつあります。どうか皆さん、もう大聖堂で祈りを捧げるのはやめてください。祈りのない生涯をこれからは送ることにしましょう』

先代王女のマリナリーゼが国民に向けて声明を出したの

が二十年ほど前であり、祈りを全面的に禁じたのがその頃の話。

反発した市民は暴動を起こし、結局、先代王女は失脚。王位は妹のフィオーネに譲渡じょうとされた。

そして妹のフィオーネが取った策が、街中に張り巡らされた張り紙だった。現国王はあらゆる事柄に徹底して不干渉を貫く姿勢をとっていた。——強行策をとって立場を失った姉を見ていたからだろう。

けれど何の意味もない。

現に大聖堂には、今日も人々が、種族の枠を超えて大勢集まっていた。

ある魔族たちがいた。「なあ聞いてくれ！この前こ

で『可愛い女騎士と巡り合えますように』って祈ったんだわ」「おう。どうなった」「女騎士に殺されかけた」「……………」
「まあ祈りは叶ったんだけどな……………違う、そうじゃないって感じだったわ」「……………」

ある人間たちがいた。「億万長者になれますように億万長者になれますように」「ねえ見て。あの人また来てる……………」
「やだわあ。あの人いつもここで祈ってるわよね」「どうせ叶いつこないのに」「ところであなたは今日何を祈るの?」「え?」「アレックスくんどうもくらくらよひに」「あ?」
先週からあたしアレックスくんと付き合ってたんだけど」「は?」「ああ?」

ある獣人たちがいた。じゅうじん「人間の女の子と付き合いたいん

だが「だが俺たちは毛むくじやらである」「付き合うのは困難と見える」「……………」
 「早く人間になりたい」
 どこからどう見ても俗にまみれた人ばかりが、大聖堂へと連なっていた。

ああもう、こんな願いをする人ばかりで、こんな願いすら叶えてしまおう大聖堂だから、僕は好きになれないのに。

「……………」

だというのに。

けれど僕も、気が付けばその行列の中に紛れまぎれ込んでいた。身勝手な人ばかりなのがこの上なく腹立たしいけれど、それ以上に、何一つとして思い通りにならない今の僕に、腹が立っていたから。

だから僕も、憂さ晴らしに大聖堂で祈りを捧げることにした。

掻い摘んで言うことやってらんなくなっただよね。いろいろと。

あるいは何がなんでも何かにすがりつきたかつたともいえる。

そして僕は、行列を進む。

順番が巡ってきたのは、それから一時間ほど待ったあとだった。

大聖堂の中は、すべてが白で埋め尽くされていた。アーチ状になった天井は遥か彼方にあって、見上げればその場にへたり込んでしまおうほど雄大だった。

歩みを進めるたびに、足音が反響する。大聖堂には一人で入ることが通例となっ**て**いること**も**あり、ここには僕の音しか響いてはい**な**かつた。それ以外には何も響**か**ない。俗まみれの外とは完全**に**隔離かくりされた、別世界だ**つ**た。